

2009年12月13日(日)
上智大学・ARCLE応用言語学シンポジウム

学ぶ側の実態と課題

(株)ベネッセコーポレーション
Benesse教育研究開発センター

目次

1. 現行課程の高校生

1. 学校外での姿

2. 学校での姿

(1) 学習全般

(2) 高校での英語学習

(3) 中学校での英語学習

2. 2013年高校1年生が経験する変化

3. 学ぶ側の課題

Benesse教育研究開発センター

■ Benesse 教育研究開発センターWEBサイト

Benesse® 一人ひとりの「よく生きる」のために。

Benesse® 教育研究開発センター

情報誌検索: キーワード検索 事例校検索

HOME 情報誌ライブラリ 調査・研究データ 教育フォーカス Benesse教育研究開発センターについて

おすすめ

- 進路指導・キャリア教育を考える
- 新学習指導要領とこれからの教育
- 子どもの本音がわかるスペシャルコンテンツ
- 家庭教育について考える

教育内容・方法・形態の開発

日本の教育の未来に向けて最先端の教材・テストやICTを利用した学習デザインの研究・開発を行っています。

情報誌ライブラリ

要注目の教育動向や先進事例校の取り組み、第一線の研究者の知見などを紹介。学校教育に携わる方の活動をレポートします。

教育フォーカス

保護者や学校の先生に向けて、独自のテーマでお届けする担当者おすすめの教育情報です。

VIEW(ビュー)21「小学校向け」
Vol.2 特集:「活用」から見る算数の授業

VIEW(ビュー)21「中学校向け」
Vol.2 特集:「家庭学習」- 机に向かう習慣づくり

Benesse 2010年「子どもの教育を考える」
“聞いて、どう思う?”子どもたち、の生の声はこれから

Web:

<http://benesse.jp/berd/index.shtml>



1.1.学校外での姿

①放課後の過ごし方

高校生の放課後での学習時間は1時間強程度

表1 高校生の生活時間(1日あたり・平均時間)

		睡眠	学習 [※]	外遊び・スポーツ	友だちと過ごす	メディア	部活動	アルバイト
全体		6時間35分	1時間17分	12分	2時間41分	5時間24分	1時間24分	12分
学年別	高1生 (n=948名)	6時間39分	1時間15分	12分	2時間40分	5時間12分	1時間27分	8分
	高2生 (n=874名)	6時間32分	1時間18分	13分	2時間43分	5時間37分	1時間20分	16分
性別	男子 (n=860名)	6時間42分	1時間13分	15分	2時間14分	5時間06分	1時間34分	9分
	女子 (n=945名)	6時間30分	1時間20分	9分	3時間06分	5時間40分	1時間14分	14分

62.7%の高校生は学習時間を増やしたいと思っている

【学習時間】
小学生 5・6年 平均1時間11分
中学生 1・2・3年 平均1時間36分

※「学習」の平均時間は、「学校の宿題をする」「学校の宿題以外の勉強をする」の合計。
いずれかが無回答・不明の場合は分析から除いている。

出典: Benesse教育研究開発センター「放課後の生活時間調査 子どもたちの時間の使い方[意識と実態]」速報版、2009年

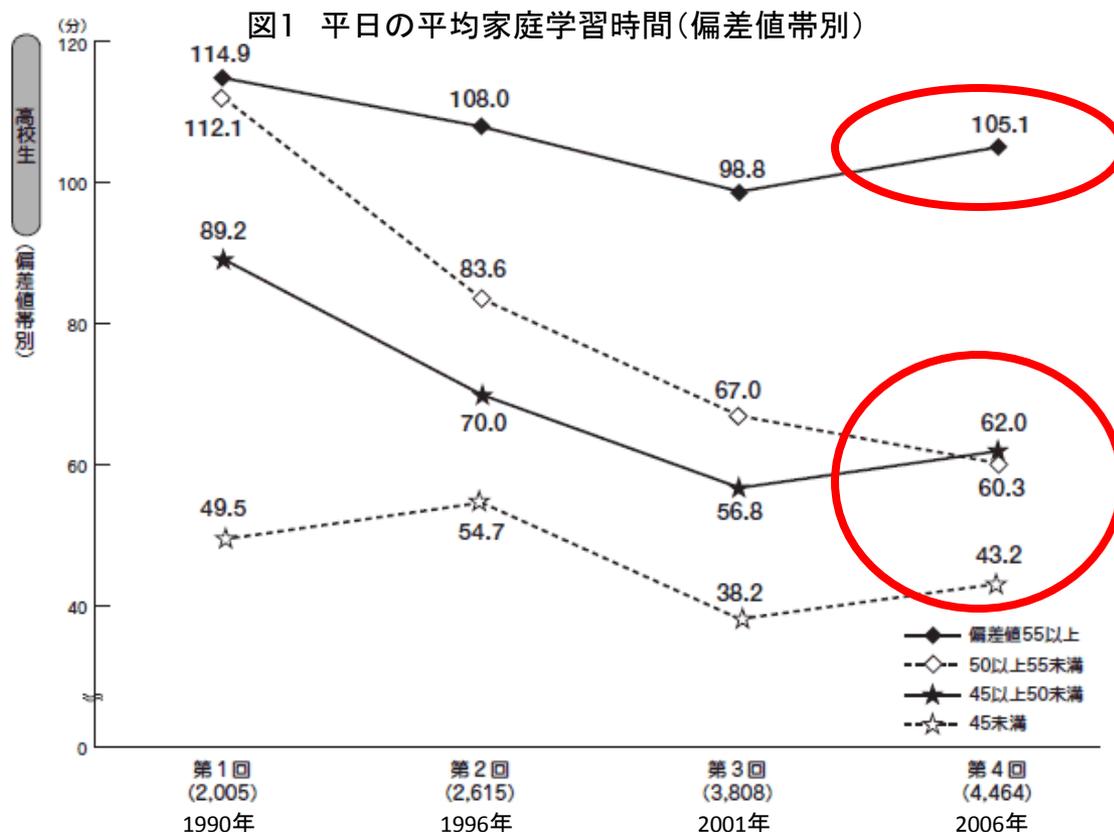
© Benesse Corporation, 2009

1.1.学校外での姿

②学習時間

学習時間は学力の上位層と中・下位層とで異なり、2極化の傾向

Q:あなたはふだん(月曜日～金曜日)、学校での授業以外に1日にだいたい何時間くらい勉強していますか。
学習塾や予備校、家庭教師について勉強する時間も含めてください。



注1) 高校生の偏差値は、弊社「進研模試」のデータを使用。

注2) ()内は全体のサンプル数。全国4地域(東京都内、および東北・四国・九州地方の都市部と郡部)の高校2年生(普通科のみ)

高校の平均偏差値55以上は、第1回422名、第2回830名、第3回1,462名、第4回1,593名。50以上55未満は、第1回621名、第2回435名、第3回824名、第4回905名。

45以上50未満は、第1回562名、第2回231名、第3回619名、第4回416名。45未満は、第1回400名、第2回1,119名、第3回903名、第4回1,550名。

出典: Benesse教育研究開発センター「第4回学習基本調査・国内調査報告書・高校生版」2007年

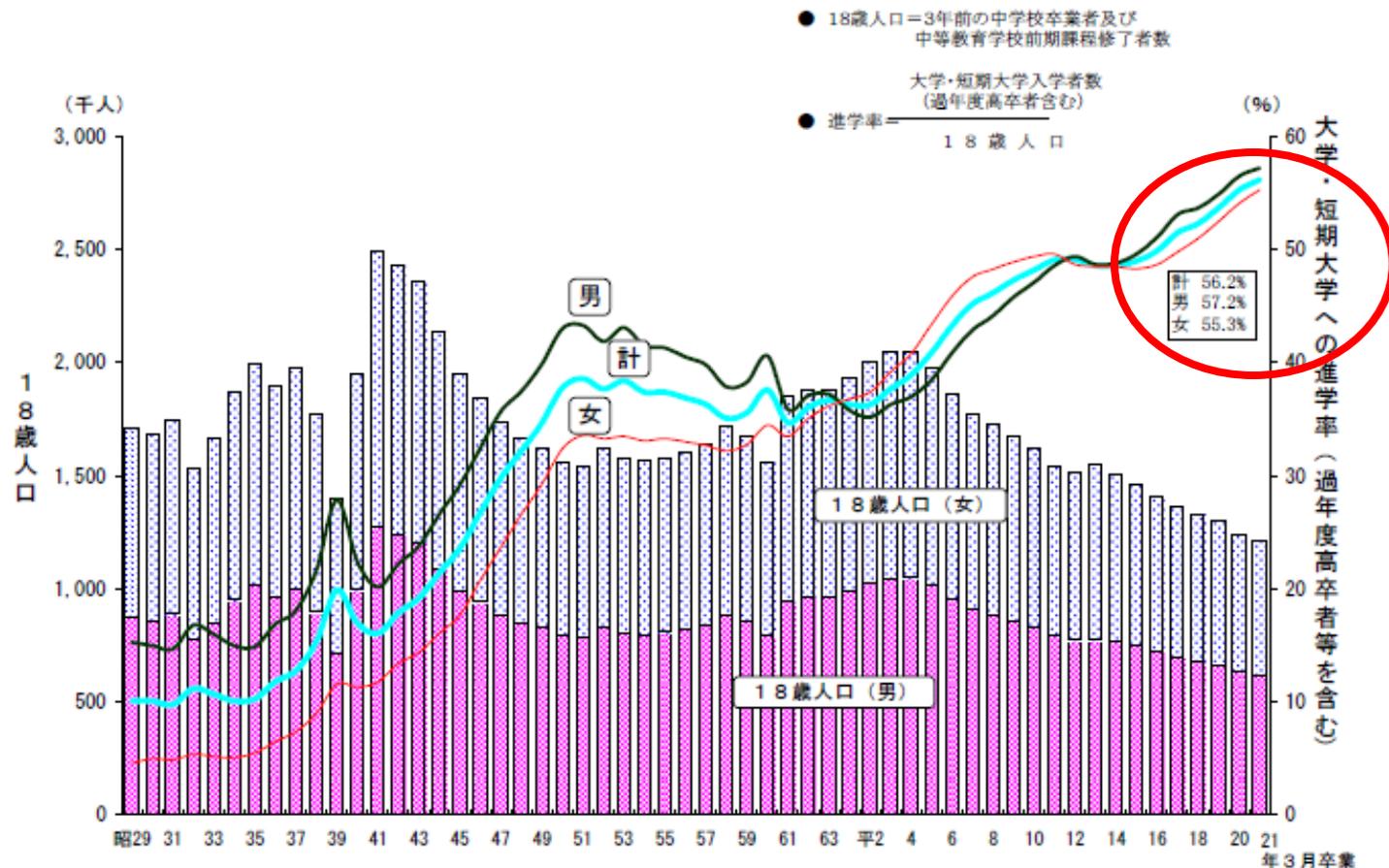
© Benesse Corporation, 2009

1.2.学校での姿 (1)学習全般

①大学進学率

大学・短期大学への進学率は平成21年も5割強で、年々増加傾向

図2 大学・短期大学への進学率の推移



出典:文部科学省「平成21年度学校基本調査速報 参考図表」2009年

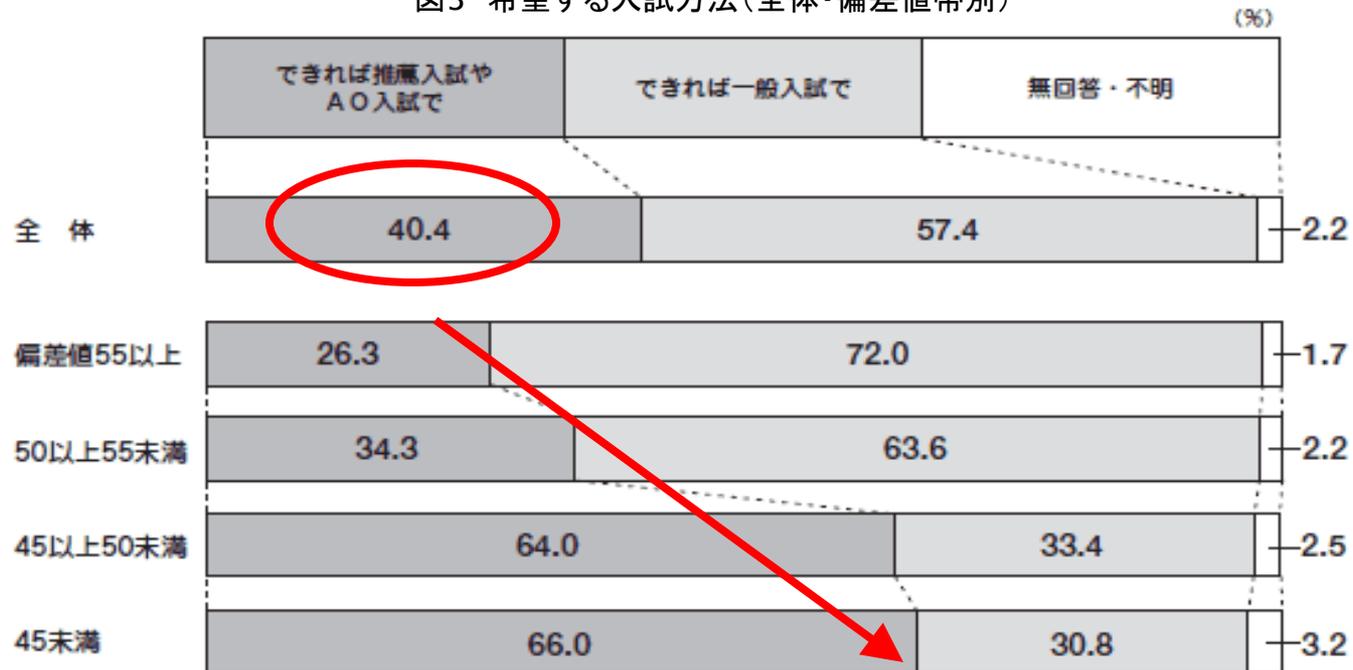
1.2.学校での姿 (1)学習全般

②希望する大学入試方法

推薦やAO入試を希望する高校生は4割程度。成績によって希望する割合が異なる。

Q:大学へ進学する方法には、大きく分けて「推薦入試やAO入試」と「一般入試」の2つの方法があります。
 あなたは、どちらの方法で進学したいですか。あなたの希望にどちらかといえば近いほうの番号1 つに○をつけてください。
 1. できれば推薦入試やAO入試で 2. できれば一般入試で

図3 希望する入試方法(全体・偏差値帯別)



注) サンプル数は全体3,417名。偏差値55以上1,516名、50以上55未満837名、45以上50未満314名、45未満750名。
 母数は、希望する進学段階が「四年制大学まで」「大学院まで」と回答した3,417名。

調査対象: 高校2年生(普通科のみ) 全国4地域(東京都内、および東北・四国・九州地方の都市部と郡部)。
 高校生の偏差値は、弊社「進研模試」のデータを使用。

1.2.学校での姿 (1)学習全般

③勉強への意欲

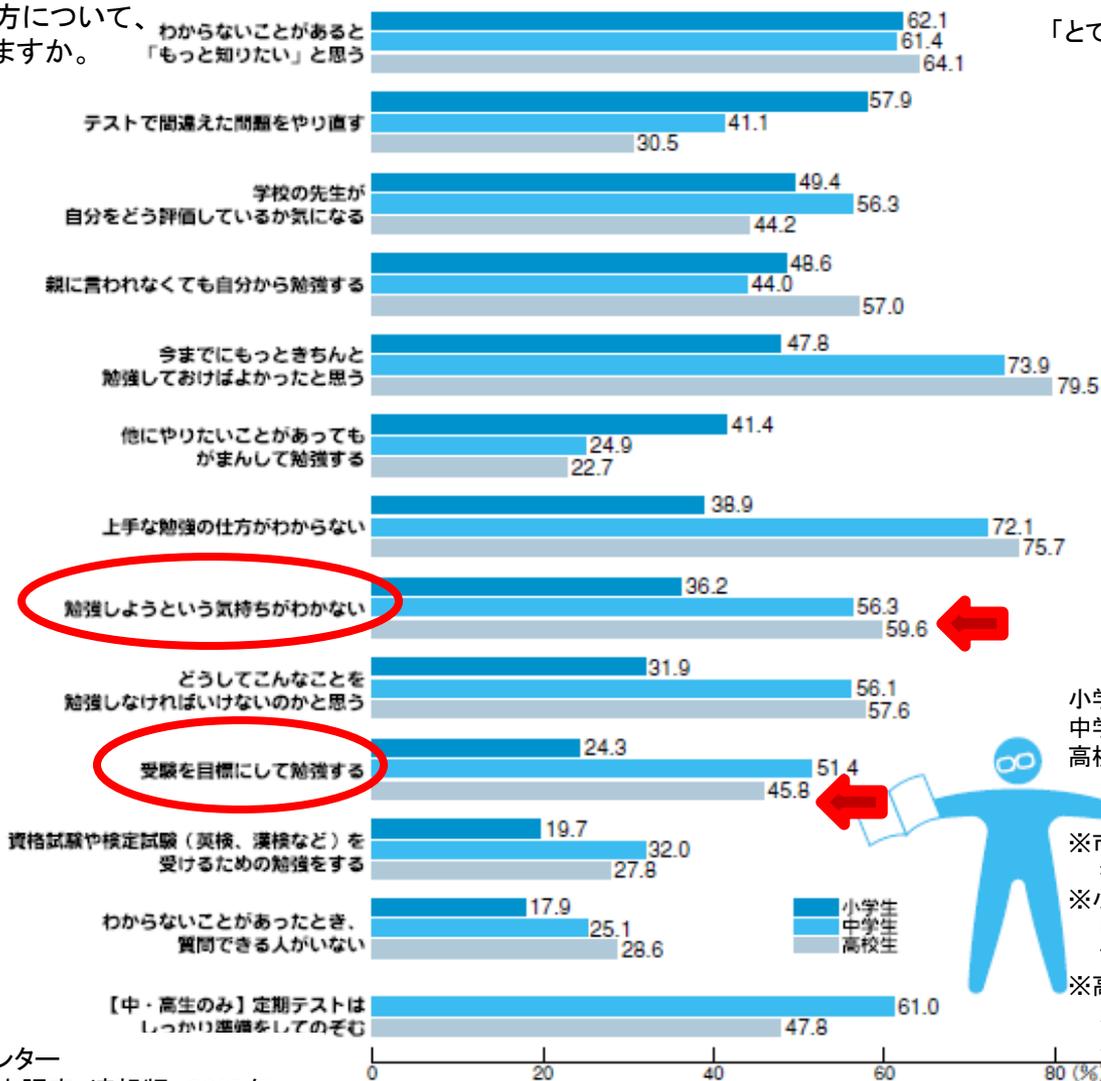
高校生の約6割が「勉強しようという気持ちがわからない」を肯定
「受験を目標にして勉強する」が5割弱

Q:あなたは勉強の取り組み方について、次のようなことがあてはまりますか。

わからないことがあると「もっと知りたい」と思う

「とてもそう」+「まあそう」の%

図4 学習の取り組み方



小学生(小4・5・6生) n=4,240名
中学生(中1・2・3生) n=4,550名
高校生(高1・2生、普通科のみ) n=6,051名

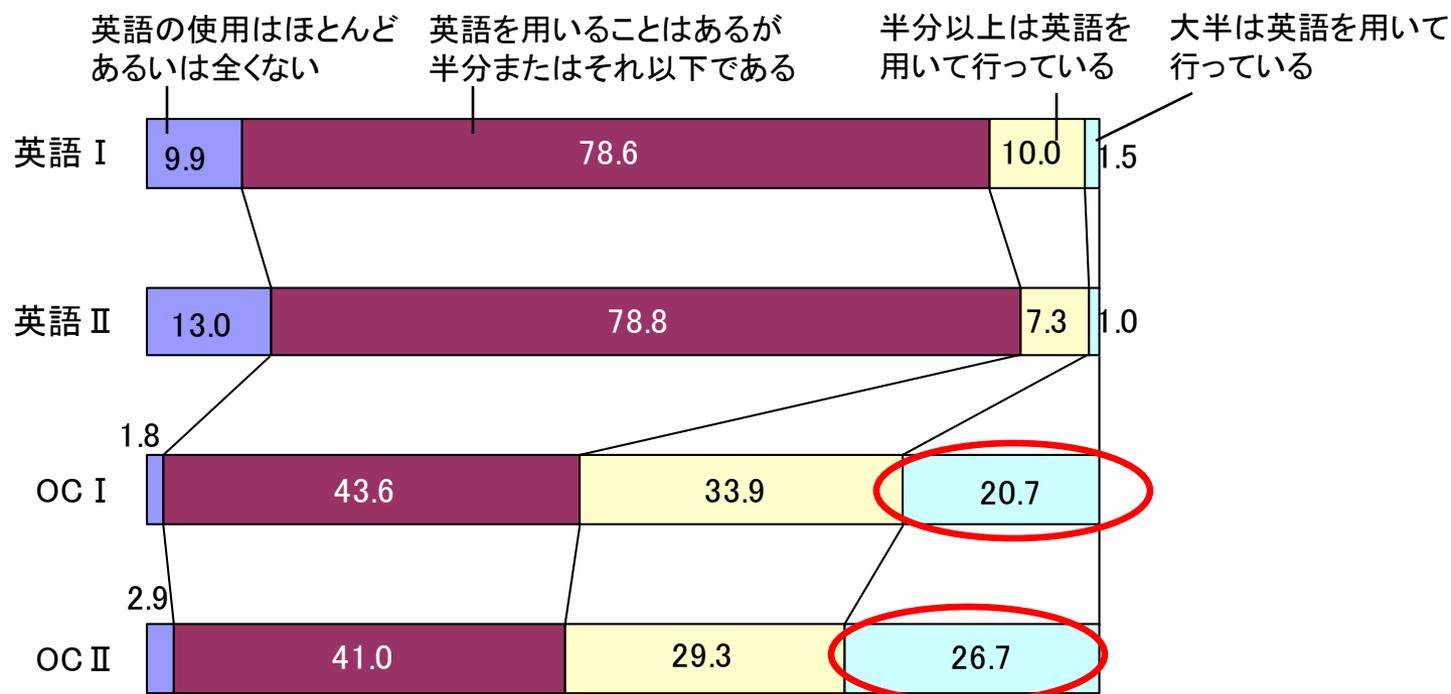
※市区町村の人口規模および人口密度を考慮した有意抽出法
※小・中学生については、大都市(東京都内)、中都市、郡部の3地域区分を設定してサンプルを抽出した。
※高校生については、上記の3地域区分に加え、学校の種別やランクを考慮してサンプルを抽出した。

1.2.学校での姿 (2) 高校での英語学習

① 教員の英語使用

「大半は英語を用いて行っている」教員は、OCで5分の1から4分の1

図5 授業における英語の使用状況



n=「国際関係学科等とその他の学科等の併設校」「国際関係学科等は置いていない」を併せた3701校のうち、英語 I、英語 II、OC I、OC IIを実施している国際関係(語学を含む)以外の学科・コースについて(学校数)

(英語 I n=3610校、英語 II n=3436校、OC I n=3213校、OC II n=614校)

出典: 文部科学省「英語教育改善実施状況調査(高等学校)」平成19年12月実施調査

1.2.学校での姿 (2) 高校での英語学習

② 英語力

現行課程が目指す指導(新課程と基本的に同じ方向性)を
実践した学校では英語力が伸びている

図6 英語コミュニケーション力の3年推移 (点)



<スコアの目安>

540~ 英語圏の2年制大学への留学に挑戦できるための最低限レベル



440~ 短期の語学留学で英語圏に行き、授業についていくための最低限レベル

380~ 英語圏へのホームステイや海外旅行に行って、英語体験を楽しむ最低限レベル

※ GTEC FSスコア: GTEC for STUDENTS TOTAL スコア
(Listening, Writing, Reading 合計)

※ 2005年度入学者の平均スコア 学年別推移

SELHi (IV~VI期) 校	8,039名
ポストSELHi (I~III期) 校	5,790名
その他の学校	42,586名

出典: ベネッセコーポレーション集計
© Benesse Corporation, 2009

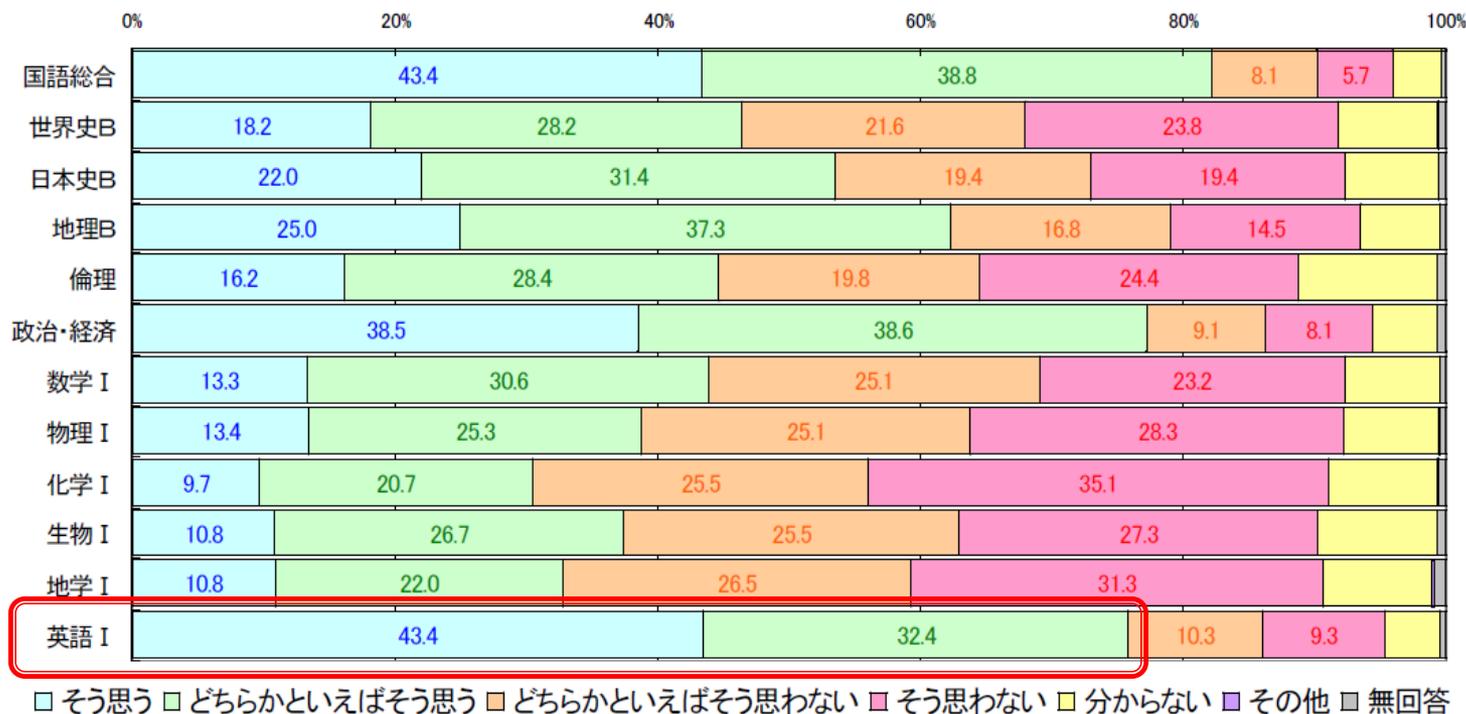
1.2.学校での姿 (2) 高校での英語学習

③ 英語に対する意識

「入学試験や就職試験に関係なくても大切」と4分の3の生徒が回答し、他の教科より高い。

Q: 当該科目の勉強は、入学試験や就職試験に関係なくても大切だ。

図7 学習に対する意識



英語 I : n=29,880名、平成17年5月1日現在の国・公・私立高等学校(全日制課程)(中等教育学校の後期課程を含む)の第3学年

出典: 文部科学省「平成17年度高等学校教育課程実施状況調査」平成17年11月実施調査

1.2.学校での姿 (2)高校での英語学習

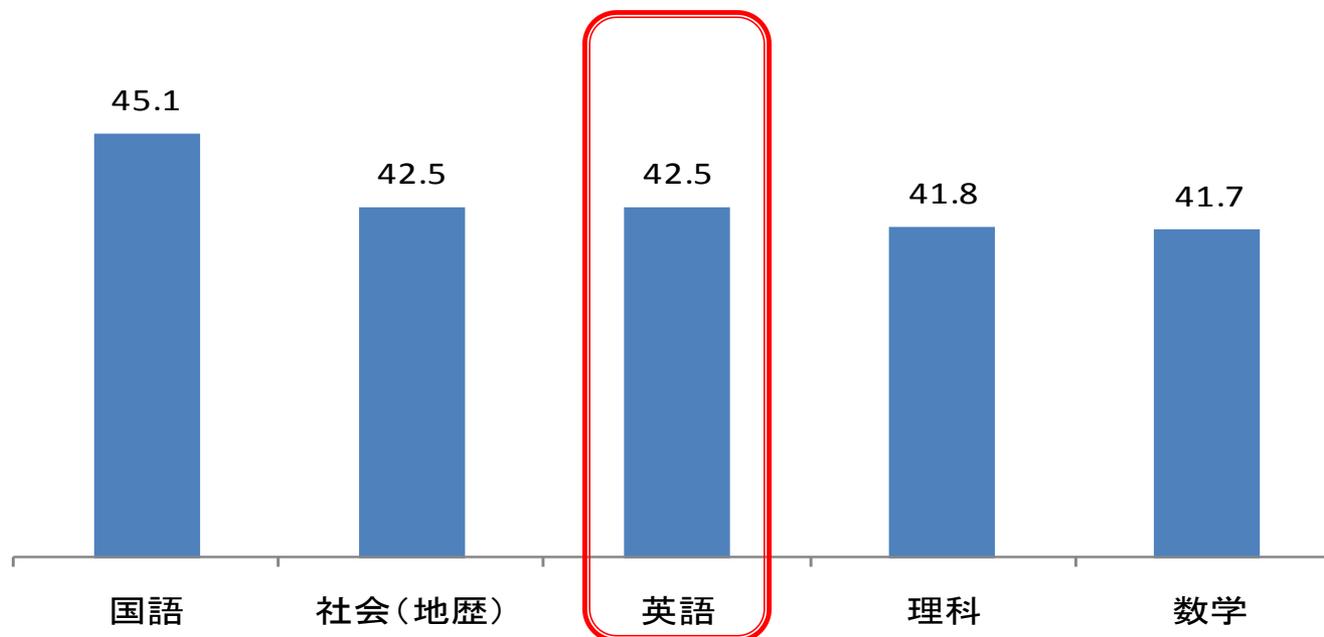
④英語の好き嫌い

「好き」は約4割程度で、主要教科とほぼ同じ割合。

Q:あなたは、次の教科や学習の時間の勉強がどのくらい好きですか。

図8 好きな教科

「とても好き」+「まあ好き」の%



n=4,464名、全国4地域(東京都内、および東北・四国・九州地方の都市部と郡部)の高校2年生(普通科のみ)

出典: Benesse教育研究開発センター「第4回 学習基本調査 国内調査」速報版、2006年

1.2.学校での姿 (3) 中学校での英語学習

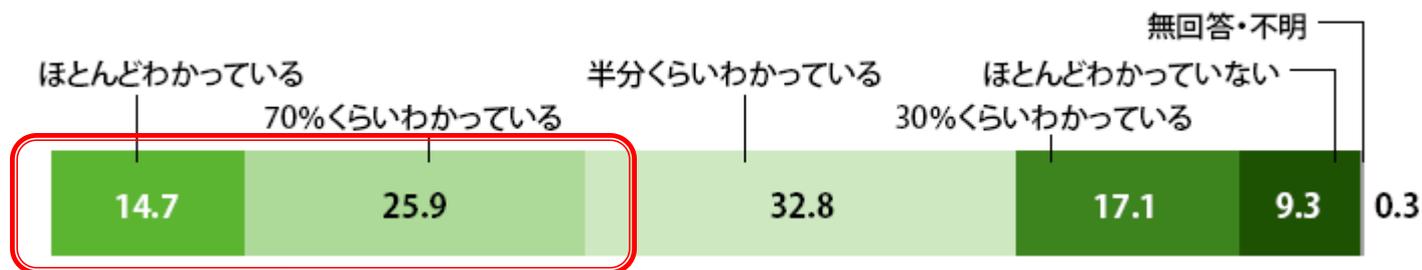
①英語の授業理解度

「ほとんどわかっている」「70%くらいわかっている」中学生は合わせて約4割

Q:あなたは、学校の英語の授業をどれくらい理解していますか。

図9 英語の授業の理解度

(%)



n=2,967名、全国の中学2年生(公立校)について、市区町村の人口規模および人口密度を考慮した有意抽出方法

出典: Benesse教育研究開発センター「第1回中学校英語に関する基本調査(生徒調査)」速報版、2009年

1.2.学校での姿 (3) 中学校での英語学習

②英語の得意・苦手

英語を苦手と感じている中学生は約6割。

Q:あなたは英語が得意ですか、苦手ですか。

図10 英語の得意・苦手

(%)



このうち、8割弱が「中1の後半」までに英語を「苦手」と感じている

n=2,967名、全国の中学2年生(公立校)について、市区町村の人口規模および人口密度を考慮した有意抽出方法

出典: Benesse教育研究開発センター「第1回中学校英語に関する基本調査(生徒調査)」速報版、2009年

2.2013年高校生1年生が経験する変化

① 2011年 小学校新学習指導要領 施行

2013年高校1年生の半数以上が、
小学校6年生で外国語活動(移行措置として)を経験

■ 新学習指導要領(小学校)の特徴

- 小5・6年生で年35h「外国語活動」(英語)必修化
- 「英語ノート」を使用
- 担任とALTによるT.T.を推奨
- 評定なし

■ 2013年高校1年生が経験していること

- 移行措置期間 2009年～ (2013年高校生:2009年現在の小6生)
⇒ 移行措置段階での外国語活動
約6割の小学校が必修化後の時数(週1)実施

(出典:文部科学省「平成21年度公立小・中学校における教育課程の編成・実施状況調査」より)

2.2013年高校生1年生が経験する変化

② 2012年 中学校新学習指導要領 完全実施

中3で新課程の英語を学び、新課程対応の高校入試を経験

- 新学習指導要領(中学校)の特徴
 - 語彙数増加(900→1200語)
 - 授業時数増(3h→4h)
 - 4技能統合型指導
- 2013年高校1年生が経験していること
 - 2012年(中3)中学校新課程施行
 - 高校入試:新課程対応の入試を受験

3. 学ぶ側の課題

(1) 現行課程の高校生の延長線から考えられる課題

■ 学習意欲・学習時間の低下と二極化

【課題】中・下位層の生徒の**学習意欲・学習時間**をいかに引き上げるか

■ 大学入試が圧倒的な学習モチベーションとして作用していない

【課題】どのような**モチベーション**が有効か

■ 生徒は英語の実践的な必要性を感じつつも、指導は大きく変わっていない一方で、現課程が目指す指導を実践した学校で英語力が伸びた実態

【課題】いかにして、**実践的な英語力**を伸ばすのか

■ 中学校までで6割の生徒が英語につまづきを感じている実態

【課題】**高校入学時**にどのように**対応**すべきか

3. 学ぶ側の課題

(2) 2013年高校1年生についての課題

- 小学校段階 約6割の生徒が週1時間の外国語活動*を経験

* 移行措置として

- 中学校段階 中3で新課程の英語教育・高校入試を経験

【課題】高校入学時点でどのように対応すべきか



いかにして高校卒業時の英語力を伸ばすか

ARCLE Action Research Center for Language Education

ARCLE トップ
ARCLE assists learners and teachers of English as a foreign language by gathering data related to English education.

Outline **ARCLE概要** About ECF **ECFとは** Reports **研究ノート・研究会レポート** Data Base **英語教育調査データ** Data Base **書籍・発刊物**

ARCLEの理念

これからの英語教育のグランドデザインに基づいて、幼児から成人まで一貫した英語教育を実現するための実証的な言語教育研究を推進し、発信していきます。

お知らせ 一覧を見る(レポートイベント)

- 09/11/4 **ノート** 第6回研究ノート オバマの就任演説についてのノート **New**
- 09/10/2 **レポート** 第2回研究会レポート CEFRがヨーロッパに与えたインパクトと日本の英語教育への示唆
- 09/9/1 **イベント** 「ARCLEシンポジウム2009 - 新学習指導要領を踏まえた高校英語の指導を考える」開催のご案内



ARCLE設立の背景 Grand Design

英語教育における「グランド・デザイン」の必要性

小学校への英語導入をめぐる議論の中、日本の英語教育には小学校から大学までを貫く健全なフレームワークがないということが課題とされています。フレームワークがないということは、たとえば小学校と中学校で教える内容がずれが生じ、英語嫌いを生み出してしまいかねません。多くの日本人の願いでもある「使える英語力」はそもそも、英語を学び始めたときから成人まで、一貫して育てていくものです。

ARCLEは、日本の英語教育へのグランド・デザインを示し、深めるとともに、英語教育の課題を、データや事実に基づいて明らかにしていきます。英語教育の世界にあるさまざまな思いや「あるべき姿」論に対し、豊富なデータによって客観的に課題を整理し、よりよい英語教育の方向性を示すことに貢献したいと考えます。

ARCLEの研究基盤 Frame work

一貫した英語教育の「フレームワーク」

ARCLEの研究の基盤には、ECF ~English Curriculum Framework~があります。ECFとは、幼児から成人まですべてを包括する英語教育の枠組みであり、さまざまな示唆や提案を含んだ英語教育のグランドデザインです。ECFは、英語教育を通して育てるものばかりか、実践的な英語コミュニケーション能力とは何かといった、英語教育の根本的な課題にまで遡り、問い直します。と同時に、英語教育の在り方を考えていくうえでの指針でもあります。

ECFは、外国語として英語を学ぶ日本人が、英語を使えるようになるための学びのデザインであり、長い間、英語を学習しても使えるようにならなかった...という多くの日本人の苦しみに対する回答のひとつでもあります。

<http://www.arcle.jp/>